

2倍近い水準だ。

乳牛は22万6000頭。15、16年と減少したが昨年は前年比2%増えた。乳価が増額傾向にあり、金融機関から資金調達しやすいことが大規模化を後押しする。また乳牛の雌に和牛の受精卵を移植し、代理出産させて効率良く子牛と生乳を生産する動きも広がる。

もっとも、飼育戸数は減少が止まらない。17年は乳牛で1326戸、肉用牛が580戸だ。それぞれ10年前より2割以上少ない。

豚は戸数が26戸と少ないが、約7万頭と10年間で倍増した。半面、採卵用の鶏は21万7000羽と過去10年で2割近く減った。馬も10年前から45%減り、管内畜産業は牛と豚へのシフトが鮮明だ。

## フランスから種馬 十勝牧場 6年ぶり

2018年4月7日

【音更】家畜改良センター十勝牧場（町駒場、桜井保場長）は6日、フランスから6年ぶりに導入した農用馬の種雄馬2頭を関係者に公開した。9日から精液の販売を始める予定で、十勝の馬生産を下支えする。



フランスから導入された（左から）エラン・ド・ネスクとファビュルー

ブルトン種のファビュルー（3歳、体重870キロ）、ペルシュロン種のエラン・ド・ネスク（4歳、855キロ）。日本馬事協会（東京）が昨年夏に購入し、11月に空路で十勝牧場に到着した。検疫と調教が終わったことから公開した。

十勝牧場は国内で唯一、農用馬の改良、増殖を行う機関。約200頭を飼育し、種雄馬は7頭いる。十勝は国内有数の農用馬の産地で、多くが十勝牧場の種雄馬を活用している。近親交配による繁殖障害を避けるため、定期的に海外から種雄馬を導入している。

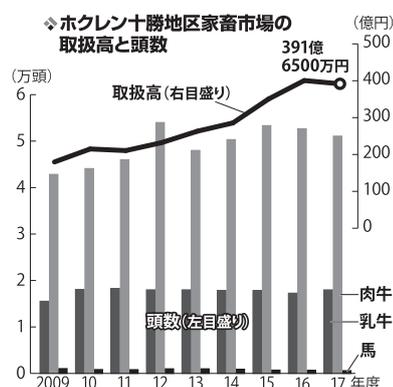
精液販売のほか、今回導入した馬の子どもを、種雄馬として2021年から農家に貸し付ける。

桜井場長（58）は「農用馬は、ばんえい競馬でも活躍している。馬産の力強い発展の支えになれば」と話している。

## 家畜取引391億円 2%減 枝肉一服も底堅く 十勝市場6年ぶり ホクレン

2018年4月26日

ホクレン十勝地区家畜市場（音更町）の2017年度取扱高がまとまり、過去最高だった16年度比2%減の391億6500万円だった。前年を下回るのは6年ぶり。食肉処理後に流通する枝肉の価格上昇が一服したことで、肉牛が取引頭数、単価とも減少した。ただ後継者不足などから府県の生産基盤は揺らいでおり、十勝産の引き合いは依然として強い。乳牛を含め、家畜市場は当面、底堅く推移するとの見方は多い。



十勝の家畜市場は肉牛と乳牛は毎月、馬は年3回開いている。管内産の牛馬が主な取引対象となり、畜産農家や酪農家など道内外から買い手が広く集まる。

取扱高の7割近くを占めるのが黒毛和種や交雑種（F1）などの肉牛。17年度は7%減の263億5800万円だった。取引頭数は5万1082頭と約1600頭少なくなり、1頭当たりの平均単価も減った。

管内では畜産農家の大規模化が進み、肉牛の増産意欲は強い。これに対し、全国的には生産量が減少傾向。結果、管内の肉牛の需要が高まり、生後1年未満の子牛を中心に取引価格は上昇が続いていた。

ところが、食肉処理後の枝肉価格が頭打ちとなり、十勝産の子牛を買って肥育・出荷する管外農家の採算が厳しくなり始めた。このため十勝市場の価格上昇にもブレーキがかかった。

乳牛の取扱高は17年度も好調で、10%増の123億400万円。取引頭数は1万7991頭と約700頭増えた。乳価引き上げや搾乳ロボットの普及を受け、生乳増産意欲が強い酪農家が多いのが背景にある。馬の取扱高は5億200万円と前年度か